

# 最明寺殿百人以上臈

## 上之卷

三つの鱗形―北條家の紋形

別當―長官  
六十四本―六十  
四卦―昔、伏義八  
卦を作り、周の文  
王廣めて六十四  
とす  
鶴りのなき世云  
デー後冷遺の  
偏のなき世なり  
けり、御月  
の句は、  
太祝詞―本は、  
稱

周書に曰、國を治むるに三常あり。一つには君賢を擧るを以て常とし、二つには官賢に任ずるを以て常とし、士賢を敬ふを以て常とし、合せて三つの鱗形、北條五代の鎌倉や。時の時たる時頼の、執權の代ぞ私なき徳を隠して權貴に誇らず。祝髮して最明寺殿道崇と號し、名越が谷の法華堂に、故右大將頼朝卿の尊影を木像に刻み奉り、大江の僧正廣辨を別當に請じ居ゑ、莊嚴靈殿在すが如く、神易と名け、六十四本の御籤を籠め、凡國家の政道に、過りありや無しやとて、我身を御籤に試みて、糺し給へる賞罰に、天地自然に僞りの、無き世なりけり村時雨、冬至の日を吉例にて、翌年の政所始め、御嫡子天女丸時宗十六歳、御舍弟式部の冠者時定二十三歳、其外連署昵近の歴々、法華堂に群參あり。錦の戸帳開くれば、各「はつ」と頭を垂れ、生るに仕ふる如くなり。大江の僧正太

君一頼朝

上り屋敷一没收  
せられし屋敷

祝詞奉り、御籤の御宮押戴おほせいて、千早振る正直路の御籤の文、讀上てこそ請じけれ。「それ千里の地を得るは、一賢臣を得るには如しかず、千金を連るは、一賢人をもとむるには如しかずと云々。此文の心は、譬へば、大國を従へ、萬寶を需めんと思はば、先づ臣下の賢者をもとむべしとの御知せ。目出度き御籤候」と考へらるれば、最明寺殿聞給ひ、「我も豫て存ずる處、臣等が心、君の冥慮に相適へり。然らば建曆以來、御勘氣、謀反の輩の、上り屋敷の明地多し。當代忠勤の方々へ分ち與へん。それく」と、中原大外記執筆にて、仰おほせに隨したがひ記しける。先切通しの梶原屋敷は、海を見晴し山に沿そひ、境内分には過たれども、宇都宮新庄司朝平に恩賜ある。是れはこれ父朝綱が、梶原を射留たる舊功、且は其身も學問好み、記録を集め、文武の嗜み、行跡道を守る由、外を勵まし、徳を勸むる御褒美として、向後若君天女丸殿、御師範にこそさよれけれ。葛西が谷の佐々木屋敷、井も此佐々木兄弟は、高名諸人に獨歩すと雖、讒者の爲に没收せられし分地なれば、先祖の忠節御感に堪えず、佐々木十藏廣綱に賜けるは、故郷に飾る唐錦、絹張山の文覺屋敷、遠藤四郎に賜る處。天輪の盛長屋敷は結城の友繁。妹春川の蒲殿屋敷は稻毛彌五郎。雪の下の長明屋敷、當代和歌に名を得たる河内守光行が、光源氏の講釋場。今ぞ風雅の道

前司一前の國司

政道連署一政道  
に携はる連中

豆を煮て云々一  
兄弟相争ふ事、  
實に豆は大豆其豆  
在釜中一泣云々  
世説一  
怨絶えざる一争  
たまわぬ

までも、色を上げたる紅が谷。佐野の源左衛門常世が屋敷は、花好き者の跡ぞとて、若  
君の御花島、御休息所に賜てけり。筋違橋の秩父屋敷、赤橋左衛門所望の所。暮が谷の  
土佐坊屋敷は金田の頼繼。松葉が谷の佐竹屋敷は、城之介安盛。藤が谷の大友屋敷、豫  
て足利望みに應ず。天神山の荏柄屋敷は、仁科前司。小林郷の朝比奈屋敷、伊井島の景  
正屋敷は三浦光村、秦村に賜つたり。袖の浦の志津が屋敷、月影の阿佛屋敷、稻村崎の  
大介屋敷は、平宣時、秀時、安藤左衛門光成。其外祖流二男まで、分に應じ功により、  
住宅の地を安堵ある。「實に廉直の法制や」と、各従ひ靡きける。最明寺殿悦び給ひ、「甚  
麼に天女丸、來春よりは汝をも政道連署に加ふ可し。御影に御禮仕れ」畏つて引繕ひ、  
寶前に坐し對へば、慄と身の毛も戰慄て、忍辱柔和の佛眼も、睨ませ給ふ御影の御顔、  
二目とも拜まれず。頭の上に大盤石、落懸つたる如くにて、眼も眩み俯伏に瓦破と伏し  
給ふ。人々周章抱き退け、看病すれば氣も爽ぎ、顔色元の如くにて、不思議々々とはか  
りなり。最明寺殿驚き給ひ、「さては神君の御内性に適はぬと覺えたり。御籤に伺ひ奉れ」  
と、僧正態て神咒を唱へ、御筥を振上げ振立て、御籤の文を拜誦あれば、「豆を煮て、豆の  
豆其を焼く。烟絶えざる事、日月の千廻」と讀も終らず、僧「あら不思議や。此文は、兄弟

帥一乾より七つ  
目の卦

三世命鑑一過去  
未來現在をよく  
見とはす

の中不和にして、恨みあるとの御示し。是に付て、愚僧常々考へ置しに、疑ひなく天女丸殿こそは、九郎判官義經の再誕候。其謂れは、判官殿は丁丑の生れ、本卦帥の卦に當つて、軍術に妙を得、中秋半ばの誕生。敵を制するけい官、向齒反て猿眼、鬢の髮縮みしとや。若君の本卦支干、御誕生の年月刻限、面體骨柄、寸分相違なき上に、只今御影の御怒、彼是以て考ふれば、若君の前生は義經に極つたり。猶其驗し未々御覽合すべし」と、三世命鑑、理を照し鏡にかけて説給へば、思ひ合せて人々は、「あつ」と手を打ち給ひけり。僧正重ねて、「承れば奥州田夫者、鎌倉殿の御勘氣よ、謀反人よなんとて、義經の御墓を、馬の飼場と踏荒し、剩へ頼朝公より錦戸に賜りし判官誅伐の御教書、國中に口吟み、御骸を恥かしむ。早く御使者を遣され、彼の御判を焼捨、御墓を清め尊みなば、御勘當のしるしも失せ、判官殿の魂魄に、天然自在の御威光、今若君の御身に現れ、智謀計略軍術劍術、輕業早業武勇の達者となり給はん。其時こそ義經の生れがはりと著るく、愚僧が縁たる命鑑の易、御疑ひも晴れ申さんと、見通す如く述べらるれば、眞實にくく、左様の例多し。然らば二階堂入道は奥州に下向し、義經の御墓を祀り、同じく誅伐の御教書も召返して焼捨べし」と、仰を受てぞ退出す。斯て最明寺殿、御影の前に進み出、「さ

大祖皇帝—來の  
大祖趙匡胤

上宮太子—聖徳  
太子—夢殿—大和法隆  
寺の御にあり

貞永式目—奏時  
の撰にて北條氏  
の天下に行へる  
式目

て方々に申し渡す仔細あり、近ふ寄て聞き候へ。そも我先祖北條四郎時政より、義時、泰時打續き、六十餘州の執權、今此御影の照覽にかけ、政道私なしといへども、遠國波濤の末々、民の盛衰國守の邪正は、見るに難く聞く事遠し。唐土の大祖皇帝は、韓王堂に一人御幸の例もあり。頭陀修行の身ともなり、諸國の安危を見まほしく思へども、斯と世上に披露せば、諸人僞阿りて、誠の善惡知り難し。されば此方丈の牀をしつらふ事、餘の儀にあらず。上宮太子の身は夢殿にありながら、魂は震旦の天台山に逍遙ある。我も年月學びたる、座禪三昧の力によつて、此方丈に閉籠り、觀念を凝し、身は鎌倉の法華堂、一心は秋津洲の浦々里々巡見すべし。其間は式部冠者、天女丸と心を合せ、貞永の式目を守つて、政道怠る可らず。僧正の外此處案内禁制。座禪終りて僧正の便次第に迎ひに來れ。追付目出度く對面せん」と、禪場の戸を引立て、入るさの月の影暗く、寂寞として音もなし。若君を始め諸大名、「國家の爲とある上は、兎角う申し上難し。去ながら、給仕へ申す者もなし。萬事貴僧を頼み存じ候」と、始終の約束こまぐと、皆々本所に歸らるよ。豫て僧正唯一人に示し置き給ふゆる旅の物の具取賄ひ、僧何も歸宅候て、はや夕霧の暗紛れ、御旅立あれかし」と、音信給へば、無あら嬉しや、數年の望み達し

さすが一小刀  
百八云々一菩提樹の實にて作れる歌珠  
冠清一西行  
正を云々一邪を矯正する  
月一杖をつきにかく

錦繡段一詩集、  
二巻あり、文明  
年中五山の僧天  
隠の縁  
司馬法一兵書、  
齊成王太夫をし  
て作らしむ三巻  
あり

たり。來年彌生の末つ方立歸るまでは、我此處に在ると沙汰し給へや」と、内より扉押排く。花の袂を旅衣、笠より外は宿りなく、昔を敷寝の平包み、金軸の普門品、紫檀のさすが矢立の筆、百八の菩提樹ならで、御身に添ふる物はなし。憲清法師が世を遁れ、修行の肩に懸たるは、優しき縞の肩袋。是は浮世の人心、歪みを撓て竹の杖、月諸共に我も亦、世上の闇を照さんと、慈悲の眼の衣手や、民の草葉に窠れ給ふ、御有様ぞ 三重有難き。大學の道、明德を炳かに生民を享し天女丸、御同學には佐々木が嫡子花市、土肥の乙鶴、金子の十九、皆物讀のお伽にて、朝は武藝定つて、晝の時計を宇都宮の邸に通ひ給ひける。今日の御供は、上野國の佳人佐野源藤太常景、「若君の御出なり」と案内す。朝平立出、學問所へ伴ひ參らすれば、若君を始め、何れも行儀繕ひて、面々書物控えらる。朝平、若君を熟々と打目成り、「さて、御器用千萬。誠の聰明睿智とは若君の御事。それに依て御伽の子供衆まで、我劣らじと覺え強く、小學入りより日數もなきに、四書古文三體詩、錦繡段。此上に遊ばされんは、五經文選其外聖賢の經書、詩文の書、限りなく候得共、それまでに及ばず。弓馬の家には孫子吳子三略六韜、司馬法など申して、合戰勝負の理非を述たる七書を、能々御得心あり、兼ては史記を御覽あり、古人の心を

味はふを、弓矢取身の學問とは申すなれ。大江僧正廣辨が三世明鑑を考へ、九郎判官義經の生變りと申されしに、努々疑ひ候はず。末頼母しき御器量、彌々文武の御嗜みこそ肝要なれ。それに就て、先づ物讀みの始めには、實語經童子經、和漢朗詠菅家往來、判官殿の腰越狀、御家の式目、是等は諸人存じの書。爰に未だ流布せざる祕傳の一卷、是を御傳授致さんと、簞笥の底より取出し、「是は君の前生判官殿、高節にて御生害の時、一期の遺恨を著し、口に銜んで失せ給ひし銜狀と申す物。文法柔に候へども、無點の物に候へば、一遍教へ奉らん」と、押開けば天女丸、「さては我生れぬ先の筆蹟か」と、見ぬ世の昔懐しく、涙を聲に浮めながら、同音にこそ讀れけれ。

### 義經銜狀

「抑義經末期に謹んで曰す。苟くも清和の臺を出、多田の滿仲の家を嗣しより以來、繼父清盛に隔てられ、邊土遠國を住家とし、土民百姓等に服任せらる。然といへども、當家の御運を開き勅宣の其一ツに選ばれ、或時は、野に臥し山に臥し、又或時は、漫々たる海上に風波の難を凌ぎ、敵徒の首を斬て鯨鯢の腮に曝し、三年三月に攻摩け、大臣殿父

服仕従上事

鯨鯢の腮一鯨の口、危険の場所に臨んで敵を斬る義

會稽一旬内會稽  
山にて吳王を討  
ち前の罪を雪ぎ  
しより云ふ

尼將軍一平政子

子を擒り京鎌倉を渡し、源氏會稽の恥辱を雪ぐと雖、梶原が讒言に依て、空しく草大の軍功を黙止され、親しき兄弟を、僅の侍一人に思召替らるゝこと、只是不運と存す。將亦、前世の業因を感じるに似り。仰願はくは、梶原父子が首を刎ね、義經に手向られば、今生後生の恨みある可らず。萬端筆紙に盡し難し。恐々敬て白す。文治五年閏四月二十八日、謹上鎌倉右大將殿、源義經と、讀も終らず若君、涙に咽び給へば、同學御供の少年まで、皆々袖をぞ濡しける。朝平涙を押え、「誠に義經の御遺物ばかりにあらす、末世の教へになるべきもの。其仔細といつば、頼朝程の御大將、梶原が奸曲に誑され、實否を糺さず、御舍弟を亡し給ふ事、火の中にある寶に愛て、片手を焼くに異ならず。されば、大將としては先づ能く人を知るべき教へならずや。また梶原は、君の寵に誇つて己を忘れ、一旦の利に眼眩み人を害すと思へども、却つて我身を害する事、天に向つて唾すと、四十二章經にて説れたり。さてこそ、頼朝公御逝去の後、安達の景盛を頼家公へ讒言し、結城の朝光を尼將軍へ讒訴申しける程に、頼朝御存命の間こそ、諸人敬ひ恐れけめ、年來恨む梶原父子、何に心を措くべきと、和田小山畠山、三浦義村千葉之介、矢田小笠原藤九郎盛長、以下の御家人六十六人、鶴が岡に參會し、景時が罪五



星月の云々一晝  
月夜は鎌倉の枕  
詞なる故綴けた  
り

射塚一土を積上  
げて的をかくる  
所

平題箭一弓術を  
學ぶ時に用ふる  
箭、形小く鈍平  
なり、形かくては  
其鏃の所迄なり  
押付鏃の後方  
逆板の上  
をもちこち一遠  
近落にかく

十餘箇條、連判の訴狀を認め、因幡の守廣元を以て頼家公へ奉り、既に誅せらるべきに極つしかば、猛威を振ふ梶原が、日來の辯舌辯口も、矢筈の紋の矢も楯も、大勢に堪らばこそ。星月の編笠や、鎌倉山を衣脱にして、相模國一の宮へ、ほうくく逃て隠れしが、遑りに逸る我武者共、餘さじものと在々所々、手酷く厳しく押探され、鵜川の小鮎鷹に雉子、猫に逐れし野の鼠、あな淺ましや梶原父子、郎等下人も散りぐぐに、馬に乗ても舍人なく、鞍は置ども鎧はさよす、都の方へと志し、駿河の國を斷通る。代々我等が本國なり。父彌三郎朝綱、一族集め小的射て、勝負を樂む射塚の前、御免も請ず乗打す。朝綱弓と矢取て打番ひ、大音上げて、梶原殿と見かけたり。徒立にて通るにも、的場には故實の添ふ。禮儀もなしに乗打は、斯いふを宇都宮と知らずになせる慮外か。假し知らば知るにもせよ。朋輩の情に、人と人は許もあり。弓矢に對つて乗打は、正八幡の神罰の矢、請て見よと、白本の弓、大中黒の的矢、平題箭かけて引絞り、斷行く駒に拳を付、絃音高く切つて放せば過たず、後に乘たる嫡子源太景季が押付を、胸板へぐつと射抜て餘る矢が、親平三景時が耳の根を肩先迄、咽笛かけて射通され、親子一所に馬上より、左手右手へをもちこちの、人の鬱憤世の遺恨、此時にこそ晴てけれ。父朝綱が其時の御恩

願骨一口

靴一箇の梅といふより梅枝を晒落れて云へり

賞の餘慶によつて、此梶原屋敷を今度某拜領し、土砂あらため候へども、彼に候紅梅の早咲こそ、景時が二度の駈の簾の梅の名残りとして、植置たると承る。末の世の記念に引残し候が、折々雨の夕暮などは、梶原が一念の火、梅の梢に来る山、下女下郎などが申し觸し候へども、某は終に見ず。争で左様の事あらんと、語り給へば、人々も「あつ」と感じておはします。佐野源藤太常景、次の間より罷出、「好き時分に御供いたし、若君のお庇によつて、御講釋承り、我々の仕合一代の徳。さてく梶原奴は武士たる者の風上にも思みたる者。其時節常景生れ合せあるならば、讒言吐出す舌引抜き、願骨引裂き、踏蹂躪て退んずもの。エ、四十年遅ふ生れたなア。彼の紅梅が梶原梅か。何の彼奴が簾の梅、二度の駈も半分嘘。輕薄らしい花の色、憎い梶原奴がしやつ頬踏でくれんず」と、廣庭に飛で下り、股立擱んで古木の梅の、枝も折れよ、根も碎けよ、どうくくくくくと、うと踏付け、拳を擧て撲や鞭のほつきと折れて、落花頗る狼藉たる。當「チ、左もさうず景時」と、雑言吐て立歸れば、挨拶なくも人々は、苦笑ひにぞなりにける。時しも冴え行く時雨の雲の、雪を催す空凄まじく、山風落葉を吹立てく吹上れば、紅葉天に翩翩して、火焰の渦く如くなるに、梶原が骸骨虚空に閃き、舞下り舞上り、源藤太が髻にしつ

勳請し神靈を旗  
に移して祀る

かところそは嚙付くひつきけれ。されども人目に見えざれば、其身はさしも猶なほ知らず。心も元の心ながら、氣は逆さか上あし、醪めいてい酏やくじやうと酒に酔よるが如くなり。斯る處に、安藤左衛門光成みつなりかた力ちからより、「急きふく々の御注進みちうしん、使者ししやを走らせ候」と、大息吐たいきつひて伺候する。若君驚おどろき、「其使者是へ、急きふく々の注進ちうしんとは何事やらん」と宣のたまへば、使つかさん候。御叔父式部冠者時定殿、御家の重寶むかう、三鱗みつろうごの御旗みはたを奪さらひ取り、本國伊豆の三崎みさきへ押渡おしわたり給ひ候。勢いきひ全く逆心さかの御企みくだてと見え候。大殿坐禪だんざんに御籠みこもりの内と申し、延引のびひにては御大事みだいじたる可し。佶きつと御征伐ごせいぼつ然る可しとの注進ちうしんなり」とぞ申しける。天女丸横手あまのまるよこてを拍うて、「這こは何いかん。其旗といつば、先祖時政せんぞときまさに、江えの島の辨才天べんさいてん、直ちきに與たまへ賜たまつたる三枚の鱗うろこを旗の紋もんと勸請くわんじやうし、守まもりとも寶たからとも、是これで立たちたる北條ほつせう家け。叔父おぢは一家いけと言いながら、庶子しよしへ渡わたさん様はなし。しや何事なにごとかあらん。伊豆の三崎は扱さて置置きぬ。鬼界高麗契丹國かうらいけいたんこく、雲うんの極海ごくうみの端はて、陸りくならば駒こまの蹄ひづめの立つ限り、海うみならば檜ひのき權ごんの立たんず處ところまで、攻寄せまよせく、取返かへさで置たくべきか。天女丸時宗あまのまるときむねが鎧よろひ初はじめの初陣はつじんに、叔父おぢの首引くびひき提ひすんば、鎌倉かまくらへは歸かへるまじ。山路やまぢを廻まわつて人馬じんばの足を疲つからすな。由井ゆいの濱はまより兵へい船出せんいし、只一時ひとときに揉潰もみつぶせ。馬うまに鞍置くらけ。物の具ものぐせせよ」と、勇いさみ進まみし御有様みおさま、實じつに義經よシノリの再誕さいたんと、札ふだを打うさるばかりなり。梶原かぢはらが死靈しりやうに侵おかされし源藤太進出げんとうたいしんいで、「此度このたびの先陣せんじんは、此

此時宗が云々  
先陣後陣も時宗  
居ちアばせ上我  
あるうちはなら  
ぬと也、爰は逆  
略の作りかへ

常景が賜つて、眞先懸ふするにて候。仰付られ候へ」とこそ望みけれ。若君聞も敢ず、「いやさ、先陣も後陣も此時宗がなくばこそ。先陣は某よ」驚いやく、殿は大將軍。是非先陣は常景に賜はれかし」と詞を返せば、天「否とよ。大將軍とは父最明寺殿より外になし。我も汝們同然よ。高名は仕勝ぞよ。親にも子にも遠慮なし。急げや急げ。速ければ待事あつて靜なり、遅くて走る道は物憂しと、名將の讀しぞかし」と、口吟み出給へば、源藤太御袖を控え「然らば今度の御舟には、阿蘭檜を立申すべし」天「ム、ウ阿蘭檜とは何ぞ」驚さん候。馬は乗人の心に任せ、退くも駈るも自由なれども、すはや退んと思ふ時、船押廻すに儘ならず、不覺の負を取るもの候。艫邊に檜を立違へ、傍枕を入れ、何方へも廻し易い様に」と言せも敢ず、天「エ、門出惡し忌々し。一足も退じと思ふさへ、退は軍の慣ひなり。豫て左様の逃用意、臆病神の末社殿」と笑ひ給へば、同學の十四、十五の輩まで、手を叩いてぞ笑ひける。藤太大きに赤面し、驚惣じて武士は進退を辨へ、命を全ふして敵を滅すを以て、良き弓取とは名付たり。和殿の様に口廣い癖に、尾の細い鮫鱈武者とて何の役に立ぬもの。近頃笑止々々」といへば、若君腹に据兼ね、「汝は只た今まで梶原を誹りながら、梶原同然の惡口、我に對つて推參千萬。サア今一言いふて見よ」と、太刀に手

をかけ給ひる。嘗ヤア最明寺殿より外大將軍はなきものを、御身も我も同然。鮫鱈とも河豚黨とも、いふて見せん」と誓合ふ。天ヲ、鮫鱈武者の、鉞請て見よ」と、拔放し給へば、土肥佐々木なんどいふ一騎當千の嫡子ども、一度に小太刀をばらりと抜き、真中に押取籠め、「我討取らん」と特く處を、朝平絶つて、「ア、く、勿體なし。大軍の前の御愼み、最明寺殿思召も穩便ならず」と、御佩刀を收めさせ、朝罷立て常景。鎮り候へ少人達」と、館に御供ありければ、光成の使者、常景が小腕捉て引出す。逆櫓の遺恨留つて、今魂に入替り、身は空船の梶原が、心となるこそ。三重淺ましき。寶治二年十一月、雲まじりの玉霞、雪の下の廣小路、一ぱいにふる黒羽織、奴が髭に氷柱るて、奥齒に嚙る唐辛、赤熊の馬標、御馬北風に嘶かせ、討て出たる大名こそ、最明寺殿の御舍弟式部冠者時定公と、勢猛なる供前を、いかつらしき頬冠、若黨二三輩引具し、押割て通らんとす。徒士の者共引挿へ、「こりや盲目奴、冠者殿を見知らぬか」と、頬冠引攫れば、佐野源藤太常景なり。馬上より聲をかけ、時ヤア常景か。時定直に訊ぬべし。突と是へ」と呼付け、はつたと睨み、「御分は身代不相應に、輕々敷忍ぶ體は訝し。兄最明寺座禪に籠りおはする内は、此冠者が執權なるに、供前張るは緩怠者。申し分に依て、屹度過怠に吩咐ん」と、返答悪くば

阿呆拂一武士の  
兩刀を奪ひて追  
放する事

鼻を明く一ちて  
を外す

まつかい様出  
題目

燈の端にて蹴殺し退んず面色なり。常景土に躊躇き、「御咎め至極仕る。去ながら、些か慮外に候はず。直に注進申上る儀候ゆる、人目を忍び右の仕合。眞平御免蒙る可し。さて御注進の趣は、先づ某が兄佐野の兵衛正常、先年人知れず闇討に討れ、其子源左衛門常世は、阿呆拂に仰付られ、兄正常が遺蹟佐野の庄、此常景に賜て奉公の忠を勵み候。然るに紅が谷常世が屋敷、某望み申せども、御用の場所とて吝惜あり。此度故もなき者にさへ、彌が上に屋敷地を賜り、多年懇望の我們には、換地の御沙汰にも及ばず。常世が屋敷を若君のお花畠に成し、拙者は鼻を明くばかり。國を有つものは、一步の地も功ある武士に與へ、弓馬の用に立てこそ。何ぞや、若君のまだ乳哺ふ飯喰ふを、義經の再誕と、はとのかいの僧正に誑され、鎌倉の御家督とて、大分の地を花畠に費し、若もの時に、草木の花が遺一本の役には立す。當家に於て、天下の執權には、誰あらふ冠者公と諸人舉つて申す所、殿の嗣せ給はんに、誰がぐつとも申すべき。さればこそ天女丸殿をけぶたく思はれ、最明寺殿座禪の内に、攻亡さん催しにて、則ち物讀の師匠宇都宮朝平、安藤左衛門光成以下を語らひ、合戦の用意事急に候。旁々御油斷ある可らず」と、まつかいさまにぞ讒しける。冠者は彼に物が付て言することは夢にも知らず、馬より飛んで下り、

加番―本職の外  
の兼務

鱈を云々―色を  
つけたるに同じ

時ヲ、く神妙の注進、大慶々々、傍からさへ齒齧きに、我に油斷ある物か。ぬからぬ證據  
を見せ申さん」と、首に懸たる錦の袋を取出し、是ぞ辨才天先祖に授け賜はりし、三鱈の家  
の旗。先此主に成からは北條家の大將なり。御分は急ぎ此御旗を、伊豆の三崎へ守り奉り、  
宇賀の社に籠置、湊の船場に關を据え、渡海の船をとごむ可し。追付跡より加番として、  
佐々木十藏廣綱を遣さん。我鎌倉を持堅め、安藤宇都宮に閉門せさせ、天女丸を押籠め  
置かん。兄貴の坊主が咎めなば、靜謐の世を騒する謀反人と訴ふ可し。我願ひ叶ひなば、  
屋敷などは軽い事。一箇國は極つて、其外の兼國望次第。辨才天も照覽あれ。嘘言なし  
とぞ語りける。常景思ふ岡に讒言し、「これ殿、とてももの事に其兄貴の坊ん様ぐるめに仕て  
遣ふとは思さぬか」時、ヤレそれを高ふは言ぬ事。心にはかり持て居よ。向後御邊は一方  
の大將と頼むからは、威勢をつくる褒美として、一家となつて北條の家の定紋讓るぞと、  
鱈をつけたる鱈形、北條殿や庖丁殿に、かゝらん末こそ三重危けれ。去程に式部冠者時  
定は天女丸時宗を無體に押え、謀反人と號し、松が岡の彌勒堂に挿て押籠め、重代の赤  
旗を伊豆の三崎に隠し置き、山手には、二重三重の柵をふり、海手に數箇所の物見の番。  
龍禪が崎の船場には、佐野源藤太常景、佐々木十藏廣綱役所を構へ、干瀉遠く逆茂木引

みるめ―手を拭きて見るに御松をか

利潤―利益

親に離れ云々―  
若年の其遠く親に離れし上は相談するものあるまじと人の嘲

き、渡海の船さへ停止あれば、漁村の賤も松魚釣り、鯛釣りがねて網の手を、餘所にみるめをかづきする、海士も逆手を打休み、波の遊魚も飛鳥も、通ふ方なき要害なり。折しも夜更け浪靜に、番所の篝火濕りゆけば、天女丸は漸々に、圍を免れ忍び出、宇都宮只一人語ひ、湊に紛れ着給ひ、云「サア時分は好きぞ朝平、兩番所も靜まつて海上は退潮なり。命限りに渡り越し、向ふへさへ着たらば、番の奴等切散し、旗を奪ひ返すべし。假し仕損じて死するとも、取返さでは生甲斐なし。死ぬるに極めていざ來い」と、飛入らんと仕給ふを、宇都宮抱留め、「如何に退潮なればとて、思召しても御覽せよ。三里に餘りし海の面、徒歩わたり人間業に叶ふ可き様候はず。潮に溺れし御死骸を、雜人們に引搜され、恥辱といひ、讒者に利潤付といひ、旁々粗忽の御振舞。御思案の要る處」と、制すれば齒嚙を爲し、云「エ、口惜し。是式の事を治めかね、父最明寺殿へ言上し、座禪の妨げ、御大願を破らんは、後代までの譏の種。親に離れし我ならば、冥途へ問ひにやらるよかと、嘲は歴然たり。翼もがな鰭もがな」と、平砂に兩足踏込んで、拳を握りはらくくと、無念涙は堰敢ず。友まどはせる小夜千鳥、驚く方の一足や、年の比十八九、初夜の月さへ早西東、潑漂ふ振にて人々をちらりと見付、足早に逃んとす。宇都宮走寄、無手と挿



つがもないーあ  
けいな

只は通さぬー何  
か苦惱を申込む

濱へ往一惣嫁の  
栖所なる故

へ、「こりや女め、必定此番所へ呼れし傾城じやな。我々此處にある體を、番の者に知らする振と見えた。是から直におのれが宿へ歸ればよし。番所へなど入ならば、海へ切てつづばめん。サア如何じや」と威しける。女「ア、つがもない。何の其様妾們である。此浦のかづきの海士。此頃御法度厳しう、若和布一本、海松一株探る事ならねば、朝夕の迷惑さ。夜は番衆の隙間もと密と見に來たばかり。眞に男に手を捉られた、一期の始めにあだ胴慾な。痕がひりくひりくする。彼の若衆様、柔はりと締直して貰ひたい」と、浦の蟹さへ當代は、只は通さぬならはしなり。朝平是は屈竟、彼奴を賺して海の淺瀬を問はんと思ひ、朝ヲ、許せく、知らなんだ。其方に問ひ度い事がある。返禮には錢遣ふ。隙は取るまい。サア彼の濱へ鳥渡來い」と手を捉れば、女「エイ錢取て濱へ往く様なものじや御座んせん」とてびんとする。若君見兼て、天「これく蟹人、我々は念願あつて對岸の三崎へ忍ぶもの。此本望達すれば、蟹のかづきも獵船も、前の通に自由なり。此灘を越す様あらば、如何ぞ指南はなるまいか。わりない事よ」と宣へば、推量やしたりけん、女何がさてお尋ねといひ世上の爲、包ん様はなけれども、昔より此入海、徒歩渡りは沙汰にも聞かず。去ながら如何なる千尋の大海にも、潮頭、潮別れ、上り潮、落潮、片

御座んなれこ  
そあるなれ  
三段一段は二  
丈六尺

もいよ―百夜と  
股とかく

潮しほ、双潮もうしほ、雌雄潮めをこしほ、投潮なげしほ、涌潮わきしほなど申し、潮合しほあひを見て、かづきの蟹あまの龍宮城りゆうぐじやうへ入るなれば、適かなはぬ事とも申し難し。あれく月影つきかげの二ツに破われて一筋ひびきぢに、尾花ななの靡なびく如くなる、浪なみの別れの末こそは、蟹あまの通かよひの潮路しほぢなれ」と、指差ゆびさしてぞ教へける。若君わかしほも朝平あさへも、「今は案内御座んなれ」と、裾褰すそかきけてさんぶくと入給いりたまふ。女メなふく設たてへ潮路覺しほぢあはえても、蟹あまならぬ身あはで危険あやない事。怪我けが遊あそばすな、先後まづあきへ」と、いへども耳みみに聽き入れず。三段ばかりは足あしも立つ。次第ついで々々に波なみは高たかし底深そこふかし。有繫あすがの朝平あさへ力ちからなく、「先々まづあき後へ」と御手ごてを取り、元の磯邊いそへに打上うらあがり、髻こしお腰こしの物ものに水入みづいらぬか。やれまづ、お足を拭ぬぐふて進すすめてくれ。頼たのむく」と捲手まくりでに、袴はかまを絞しぼるばかりなり。女メそれく人のいふ事聞きけなふ、情じやうの剛こはいはお身の損こぼ。若衆わかしほ様のお足拭あしぬぐふにも手拭てぬぐひはなし。妾わたしが鹽燒衣しほやきころも御慮ごりやう外」と、上着うはがひ下着した揉もくさにして、足の甲かぶから足頸あしくびまで、「ム、く柔やほらかなお膚はだやな。此處こゝはお膝ひざ、此處こゝは太股ふでもも内股うちももの、此もよなら妾わたしや小町こまち。お前は四位せうしやうの少將せうしやうで、車くるまの榻しぢに」と抱いだき付つく。若君わかしほ飛退とびぞろき、「慮外ものめ者奴ものめ」と、柄つかに手てをかけ給たまひしを、朝平あさへ「暫しばし」と留とどめ參まらせ、「これ女メ、彼方あなたは鎌倉かまくら殿とのの若君わかしほ。今度いまどの騒さわぎ隠かくれなければ知しつらん。汝なんぢが力ちからに海うみを超こえ、御旗みはたを奪はひ參まらせなば、財寶ざいほうの願ねがは言ことふに及およばず、例たとへ一夜いちやのお情なさけでも相違あひだあらじ」と申まさるよ。蟹あま嬉うれしけ

ひやう紋―紋の  
内を色々に彩り  
たるもの（安齋  
隨筆）

叔母君―辨才天  
をさす

九萬九千―龍の  
鱗の數

白波―知らずに  
かく

に打笑て、「左こそは見付參らせたり。誠に賤しき蟹の子の、お情とは憚りあり。鱗形の御紋付の御肌着一重下されば、世の思ひ出に肌に着け、千里萬里の荒海なりとも、浪を潛り水を分くるも蟹の業。奪返して奉らん」と申せば、若君宇都宮、「それ安い事。是なりとも」と、ひやう紋の唐衣に、唐縫したる柳裏、ひらりと脱で給ひければ、蟹は戴き打被き、岩頭に駈上り、「自は小袋坂、金龍水の池の邊に年經て栖むものなるが、江の島の叔母君より、賜つたる肌の産着を惡人に奪はれ、五體の力盡果しに、今北條家の活鱗、九萬九千の飾となつて、神變神通自在を得、刹那が間に彼の旗を奪取て參らせん」と、逆渦く波に飛入て、分行く潮八重百重、百の媚ある顔に、又尾は二十尋の金の鱗、月に映じて泳ぎ行く。辨才天の眷屬の、旗を守りの神體と、思ひ白波走りしは、帆かけし船の三重如くなり。波の音に眼を覺し、「番所騒けば惡かりなん」と、朝平若君身を潛め、磯山蔭に忍ばるよ。源藤太常景木戸を開かせ突と出、「風もなきに浪の音、千鳥鷗の亂るよは、天女丸が方より水練の忍びを入れたるに疑ひなし。驚破々々沖に物こそ見ゆれ。仙術魔法の者なりとも、我馬上に及ばんや。元來武勇第一の梶原が生靈入替りたる其驗。弓箭の本意此秋」と、懸て物の具堅めける。此處に佐々木廣綱は、相番ながら、若君に豫

木蘭地（黄赤に黄綠也、實赤に黄綠帶ぶ平義器談） 菱縫（鍔の裾板玄はる一鳥の兩翼の下に連りたる黒羽） 木置藤（温の上を二所藤にするもの） 貞丈（雜記） 錆月毛（月毛の黒みが、りたるもの） 紅裾調（上をぼかして裾に至る程紅を濁らせる卯の花云々） 白き卯花（の外皆藍に染めたる草を又一面に黄に染めたるもの） 平義器談（望筭） 矢竹（を漆にて塗りたるもの） 吹寄藤（藤を二所づつ押寄せて密く） 貞丈雜記（ねつたい） 候（まねなる） 一（ある）

て心を寄せしゆるゑ、きかぬ顔にて控へしが、常景が打立つよし、共に防ぐ風情にて、「しやつ妨けん」と馬鎧華麗にこそ扮装けれ。常景其夜の装束は、木蘭地の直垂、白銀の摺付小札、白糸にて菱縫したる斑白織の鎧を着、立ぼろの矢の二十四さいたる籠搔負、本重籐の弓持て、雨夜と云つしさび月毛の、聞ゆる名馬に乘たりけり。佐々木が扮装物の具は、紅裾濃に所々四目結摺たる直垂、卯の花を黄に返して袖標付たる鎧、筋切斑に塗篋の矢、吹寄藤の弓持て、長月といふ黒栗毛の馬にぞ乘たりける。二人互ひに劣らじと、引かけく打たりしが、常景は佐々木に一反ばかり進んで、海へざつとぞ打入れける。廣綱先を越されじと、聲をかけて、「常景殿、冬海は潮急し。腹帯が延びて見えさうぞ。深海に乗て鞍返さん。締給はぬか」と呼はれば、常景さもと思ひけん、手綱を鞍の歪に捨て、左右の鎧を踏隙し、弓弦を啞へ、腹帯を解て、引締めく締る間に、廣綱すつと乗拔て、「佐々木が家の骨法、御免あれ」といふまゝに、ざんぶと打入り、半町ばかり先に進んで泳がせける。當ねつたい佐々木殿、高名せうとて不覺ばし仕給ふな。此頃蟹のかづきも絶え、和布目繁つて見え候。馬の足纏はせて、過あらん笑止さよ。心得られよ」と誑れば、咄「オウ親にて候高綱が傳へし習ひあんなる」と、太刀を抜て水底を切拂ひ

三頭一馬の尻上の三骨、季緒相馬經には三封

磯一したぐら

笠捲型一蓋を履むるに用ふる型草分一草彼の事、胸部係訓業、靴一脚より靴に繋る組緒、辻邊宇治川先陣の作りかへ

切拂ひ、三頭にどうと乗下り、手綱繰上げ聲をかけ、馬に力を添へたりけり。冬も半ばの浦吹く風、磯打つ波を巻上て、水や空く搔曇り、天も凍りて散散り、雲の脚さへ急潮に、底の岩稜巍々として、海上遙にくわい々たり。これは一騎當千の高綱が嬌々なり。彼は文武二道の武者、梶原が魂魄なり。孰れに勝負あらばこそ。廣綱進めば常景續き、常景進めば廣綱續き、轡を引揃へ、押並べて渡すとすれば、韃太腹どうくく、波鞍壺に打越て、笠撓型に突流され、半月に乗處もあり。馬の草分鞞づくし、さらくさらく、さつと乗分け乗割て、一文字に行く所もあり。高き波には一鞭くれて、ゑいゑい聲に跳越え、低き波にはしつと常て、韃を繰て乗下し、渦く浪の右巴、左巴にくるくく、くるりくの輪乗に潮を巻解し、巻戻し、巻崩し、蹄に蹴立る潮烟、隔ての霧と立塞つて、山さへ見えぬ海の面。星を目當の雙燈、息も續せず踏もためず、負じ劣らじ我先にと、喚き叫んで渡したり。常景馬や劣りけん、馬上にや疎かりけん、三反許乗り遅れ、淺處に駒を駈寄て、漂ふ浮木に手をかけて、一息ほつと吻たれば、佐々木は沖の流れ洲に、駒を控へて鞍蓋に突立上り、「惡ふ候常景殿、伯父盛綱が藤戸の一流、海をば斯うぞ渡すもの。お先へ參る御免あれ」と、韃搔繰り乗出す。陸には兩家の郎黨組

子、波打際に下浸り、片唾を香で控えしは、前代未聞と謂つ可し。斯る處に式部冠者時定、百騎許引率し、喚いて來り、「やア〜兩人、天女丸こそ宇都宮を語ひ、何處ともなく落失たり。方々が猛勢は如何なる故ぞ」と呼はつたり。常景馬上ながら、「さては只今此海を泳ぎ越す者候ゆる、兩人斯の如く追蒐候。疑ひもなく天女丸、追詰提け參らん」と、駒の頭を立直せば、時「やれ待て〜。年に足らぬ小丁稚。彼奴們が分にて泳ぎ越す事思ひも寄らず。それは必定水練を入れて、其身は此磯山に隠れ居るに極つたり。我々山を狩出し、濱端へ追出さん。兩人海に下立て、射取れや射取れ」と下知すれば、「承はる」と常景、弓と矢取て打番ふ。佐々木も「あつ」と應へながら、過つ振にて冠者奴が眞中を、一筋と思ひ込めてぞ控えける。時「時を移すな狩出せ」と、打物抜つれ松明振り、谷よ峰よと三重狩立る。朝平、「今は是迄なり。濱の手へ落給へ」と、暫し支ゆる其隙に、若君磯邊に走り着き、背後を見れば時定、片手矢はけて追蒐る。今は詮方荒磯に、沈まば沈めとざんぶと入り、渡るともなく行くともなく、陸地に立る如くにて、四五町沖に浮み出、足下を見れば不思議やな。蟹に與へし上の衣、浪の上に漂漾して、若君を救ひ立たるは、宛から筏の如くなり。沖には常景鎌を磨き、寄せば射留ん其猛勢、陸には人數鉈揃へ、

荒磯―あらざに  
かく

火刑云々―葛は  
命。黑白鼠は日  
月。龍は無常に  
譬へたり（佛説  
譬喻經）

安房―泡にかく

返さば討んととのまめきしは、火刑に陥し罪人の取付く葛を、黑白の鼠噛つて、惡龍舌を振るといふ、苦海の譬に異らず。遁れつべうは無りけり。然つし處に二階堂入道、旅裝束にて息を量りに驅付け、「暫くく」。事の仔細は存せねども、是は大事の御使。私の儀にあらず。干戈をとまめ聞給へ。今度某大殿の仰を蒙り、奥州高館に下り、判官殿の御墓を祀淨め、同じく賴朝より御勘當の御教書を取歸り、仰に任せ只今燒捨申すからは、御勘當の罪消て、義經の靈魂妄執晴れ、若君の御身の上、武運の御祈禱たる可し」と、御教書の封を切り、下人に持せし清火を把て打かくれば、火焰炎々と天に通じて、名將の俊逸精智、悦び給ふ其驗し、白銀の翼ある白鳩、虚空に舞下り、天女丸の懷に、納まり入るぞ不思議なる。判官の虛名晴れば、讒者の猛勢力も弱り、梶原が亡魂は冥々として失てけり。常景心茫然と、夢か現か空蟬の、藻脱の殻の如くにて、手綱取る手も覺えなく、平首に抱き付く。馬も足を立てかねて、波に漾ひ、浮ぬ沈みぬ泡沫の、安房の浦路に流れ行く。冠者焦つて、「ヤア物々し。假へ生れぬ前生は、判官にもせよ、辨慶にもせよ、現在にては我甥なり。叔父に對つて逆心構へ、國を損ひ家を破る惡黨征伐、何の憚りあらん。船を浮べ熊手にかけて、搦め捕れ」と駈廻り、どつと蘆邊に下浸る。兵

鬼一が云々―鬼  
一法眼が義經に  
三略虎の巻を授  
けしを云ふ

拔手―兩手を交  
互に水上に出し  
て泳ぐ

肝の束―肝二つ  
のつけもと

術無双の義經の、靈氣を感ぜし天女丸、忽地自然の妙を得て、浪も潮も事ともせず、巖の嶮岨にひらりと飛び、磯の松が枝躍越え、大勢に断向ひ、天狗に授る飛行の術、鬼一が傳へし一卷の、太刀風騒ぐ虎の巻、獅子奮迅虎亂入、前を拂へば後にあり、地を薙れば霞に入り、陽炎稻妻水の月。宛から飛鳥の 三重如くなり。さしもの大勢一人に切立られ、冠者も數箇所の痛手を負ひ、命ばかりを遁れんと、水練は心得たり、海へどうと飛入て、伊豆の三崎を志し、拔手を切て泳ぎける。沖の浮洲に控えたる佐々木の廣綱、對ふ様に駒乗入れ、天道を守る廣綱は、天女丸の味方ぞや。尋常に腹を切給へ。左なくば佐々木が矢先にかけて、後世甲はん」といひければ、冠者大聲上で泣出し、「それは餘り慘い仕様。甚麼に水を得たればとて、三里五里は泳がれず。今の間に鰐の餌食となる我身。少しの命を助てたも。佐々木殿、廣綱殿」と、立泳して拜みける。佐々木返答にも及ばず、中差取てからりと番ひ、兵と切て放つ矢に、肝の束ねを射通され、まつかい様に跳返し、底の水屑と沈むを見て、残る軍兵うら崩れして、皆散りぐに逃散りける。時に海上漣立て、月清々たる波間より、紫金色の耳ある蛇、潮を巻き來る其音は、和琴の調の如くに、磯部の松に攀上りぐ、梢を唾へ尾を垂れて、鱗の衣をはらくぐ、拂ひ残すや三枚



七道具一七つ時  
にかく

行耐定めぬ一以  
下諸曲鉢の木の  
文を大方とりた  
り  
蝶の翅云々一有  
名の句、雪の時  
に蝶道粉翼輕  
難拾遺塵積毛  
散未判(圖機括  
法)  
一筆鴉一時類一  
人雪中に立てる  
形容  
尾羽打枯一身啼  
らしき  
浮世の民、意圖  
大徳正のおふけ  
なく云々の歌を  
とる

は、家の紋付旗の手の、優々とかよらせ給ひけり。若君三拜恭敬して、戴き納め歸るさ  
の、道の用心。佐々木は馬上に先を打ば、後を押えて宇都宮、「君判官の再誕なれば、二  
階堂は辨慶」と、敵の捨たる槍長刀、鐵柵刺叉熊手を押取打擔け、夜は白らぐくと七つ道  
具、明け六ツ五ツ五代の北條家、四ツ世の中三ツ鱗、尾緒を付てぞ語りける。

### 下之卷

#### 最明寺殿道行

最明寺殿道行  
此程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、先づ此度は鎌倉に上り座禪に籠  
り、春になり修行に出ばやと思ひ候「蝶の翅の白粉を、草に翻して梢には、露の霜毛  
を脱ぎかくる、雪は花より花多き、木曾の三坂の谷風は、吹けども袖に寒からで、名も  
妬しき風越の、峯の吹雪ぞ身には沁む。身は墨染の墨衣、宛がら雪の一筆鴉、尾羽打枯  
れし修行の旅。佛恩報謝の爲にもあらず、始終菩提の道にもあらず、浮世の民におほふ  
かな。覆へど漏る竹の笠、似合ぬ身にも引締て、しやんと召したる御有様、有難しとも

大井山一多いにか  
かく

山姫、山神、木  
の葉をば衣、錦  
と見立てたり  
深山一見るにか  
く  
兎馬一玉宛白駒  
によせたり

頼みあり。幾重越しても信濃路は、未だ谷峯の大井山、人里遠く離れ坂、千限の川に渡  
し呼ぶ、聲も嵐に埋れて、笠で招けば笠の端に、霞たばしる、氷柱からく、輕井澤。瞰上  
れば朝ぼらけ、淺間の嶽に立烟、其一筋を様々に、霞に詠じ雲に見て、歌人は思ひを述る  
とかや。我は烟の起居にも、民の籠の賑ひを、天に祈りの千早振る、雪を袂に幣とれば、  
雪は五穀の精たりと、唐人も豊年を、祝ふ兆のあれくく、地下も在所も賑々  
福々福島の、賤の妹脊の妹は靱磨る、兄は米搗く麥搗く、餅搗くく、望月の、里  
と詠むまでゑいとんくく、サアとんくく。サアとんくくくと杵の音、碓氷峠に  
差懸り、上れば下る谷川の、凍らぬ程は聲立て、春も近しと岩間水。木々の木の葉を吹  
溜て、今日山姫の衣配り、物裁よしといろくくの、錦裁なる板鼻の、宿を麓の坂本や。  
諏訪の湖水猶冴て、鴨や鷗や、鴛鴦の番も雁金も、下り居る程はをしなべて、皆白鷺と  
深山風がさらくく、さつと吹てはばつと群立、拂ふ翼に、己がとりく、色品を、分  
て見せたる雪の空、残んの月は浮めども、兎は馴睦む厚氷、驛路の馬ぞ波走る。馬にも  
鞭登、武藏も近き秩父山、八王子山の山樵も、外山の爪木樵つくし、雪を燻らす炭籠や。  
深谷の宿の深々と、冬籠せし一枝も、春待顔に初花の、咲きかけんとや一二の影、熊谷村に

佐野の墓云々  
原や佐野の旅行  
たち著にて旅行  
めばや(夫木集)  
三五—珊瑚にか

檀林一寺

江口の君一遊女  
妙西行に宿賢  
さぬ時よめる  
世を厭ふ人とし  
きけば假の宿に  
心とわなと思ふ  
ばかりぞ(新古今集)  
木の端一僧を無  
用物に譬ふ(枕草紙)

盃さかづきの、佐野くすたの墓たむかひ者まにて、強止しひどめんとと詠置よみだし、古歌こを吟かじて凌しのけども、雪ゆきの寒さむさの左さのみやば、佐野くすたの渡わたりに着給やせりふ。宿やどりもがなと夕顔ゆふがほの、それにはあらぬ小家こいへの檐のき、垂木たるき疎まはらに傾かたむきし、雪折竹ゆきせだけの上簀戸あはすきや。主人あるじは貧女あらいと覺たしきが、年としも三五さんごの玉帯たまはたき、庇ひさしの雪ゆきを搔落かきたし、落おせば襟えりに袖口そでぐちに、首筋元くびすぢもとにひやくく。ア、冷つめたや」と手てを吹ふくも、下司ひすぢ近ぢかふして猶なほ優やさし。最明寺さいめいじ殿だん離りに佇たずみ、「申しくお女郎おにようぢ、越後えちごより下總しもづめの檀林だんりんへ通とほる所しよ化けの僧そう。今日こんにちの大だい雪ゆき、前まへも後あともも後あともも參まゐり難がたし。貧子すのこの端はしに只ただ一夜いちや、頼たのみまする」とありければ、女おんなハア、お安やすい事ことながら、主人あるじの留守るすに、妾めかけが泊とまするも如何いかなり。側わきをお頼たのみますされませ。おいとし様さまや」と愛嬌あいけうある。鼻はなム、ウ主人あるじのお留守るすとは、さては和女わにようは御内衆みうちしゆか」女おんな「否いへく主人あるじは妾めかけが姉婿あねさま。此頃このころ他國たこく致いたされて、主人あるじといふは姉様あねさま」女おんな「ア、然しかれば和女わにようも主人あるじ同然どうぜん。江口えぐちの君きみが假かりの宿やどりに心留こころどむなと申ましたは、それは色いろある優法師ゆうぼうし。炭すすの折をれか、木きの端はしかといふ様なこのほ此坊主このは。色事いろじの用心ようじんならば、氣遣きぢひあるな」と宣のたまへば、娘むすめは莞爾にっこと打笑うちわらひ、「尤もつとも色いろといふものは眉目みめ容色かたちとはいひながら、何なにうやら時の機はづみ會あひでは、鼻缺はなそひでも兎口うぐちでも、油斷しゆだんがならぬ」と走込はしりこむ。天下あまを裁斷さく御身みみにも、此返答このへんたふはゆきくれて、佇たずみ給たまふぞ殊勝しゆしょうなる。世よの中なかは、何なにか常世つねよが留守るす住居すまひ、妻つまは手足てあしも土大根つちおほね、蕪かぶら、青菜あそびなも摘つま

雪は笄毛―此句  
白氏文集にあり、  
鶴髪は箱の  
毛衣

陸奥のけふ―陸  
奥の狭布の里に  
かく幅狭き布  
の産地

曲もなや―情な

持て、歸る山路の白妙に、妻ア、降たる雪かな。甚麼世にある人の、嚙面白ふ見給ふらむ。それ雪は笄毛に似て飛で散亂し、人は鶴髪を着て立て徘徊すと云り。されば今降る雪も、元見し雪に變らねど、我は鶴髪を着て立つて徘徊すべき、袂も朽て袖狭き細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな」最明寺殿、これこそは以前の女が姉ならめと、最なふく主の御方にて候か。御覽の如く旅僧の身。お宿の御無心申せしかど、主人のお留守とありしゆゑ、待もうけたる御歸り。前後を忘する大雪、今宵ばかりの御恵み、頼み入る」とぞ仰ける。妻實にく易き御事ながら、見苦しき賤が伏屋、何とてお宿と申すべき」最「いやく旅といひ、三界の家を出たる世捨人。草の筵も我爲の、玉の臺と有難し。是非に一夜」と宣へども、妻「あれ御覽ぜ。我々夫婦兄弟さへ、住居かねたる體なれば、留め申さん様もなし。是より十八町彼方に山本の里と申して、好き泊りの候へば、暮ぬ間に一足も急がせ給へ」と言捨て、庵の内へぞ入にける。最「あら曲もなや。よしなき人を待つるよ。浮世の人の情なきも、我過り」と省て、歩み疲るよばかりなり。妹の玉章涙ぐみ、「悼はしや御出家様、最前お宿とありしかども、姉様の心如何と存じ、戸外に立せ置ませし。斯く零落しも前世の因果、せめて出家に値遇せば、常

駒留て云々(古今集)

さもし見苦し  
旅にしあれば  
家にあれば  
もる飯を草枕  
葉にもる(萬葉集)  
酒漿(酒漿)

世様の武運も開け、後世の爲にも悪い事なされた様にはよもあるまじ。泊てさへ進ませ  
ば、別に馳走は要まいと、妾や思ひます」といひければ、妻ヲ、優しや。能ふぞ氣が付た。こ  
れほどの大雪に、遠くはよもや」と、戸前に出で、「なふく」旅人、お宿參らせよなう。餘り  
の大雪に申す事も聞えぬよの。悼しの有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行  
方を失ひ、一ツ所に佇みて、袖なる雪を打拂ひくし給ふ景色、古歌の心に似るぞや。  
駒留て袖打拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮、斯様に詠しは大和路や、三輪が崎な  
る佐野の渡り。是は東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦く候へども。  
一夜は泊り給へや。なふ旅の僧、旅のお僧」と招かれて、魚「それは嬉しき志、假の浮世に  
借の宿、假初ながら値遇の縁。一樹の蔭の宿も、此世ならぬ契なり」「二女」それは雨の木蔭、  
これは雪の軒古て、憂寝ながらの草枕。是へ」とこそは請じけれ。妻「いや是れ玉章、折角  
お宿申しても、供養致さん物もなし。お淋しからうが如何せうぞ」玉姉様幸ひ粟の飯。さ  
もしけれどもお慰み」と、櫃取出せば、妻「ア、其様な物何んのいの。折節悪ふ九獻もなし。  
お菓子はないか」と夕霜の、置ぬ棚をや探すらん。魚「これ兩人、旅にしあれば椎の葉に盛る  
とかや。粟の飯とは日本一の醍醐味、御馳走に預りたし」と宣へば、妻「やれくそれはお

盧生一邯鄲の旅  
舎にて粟飯炊く  
間に五十年の衆  
花の夢を見たり  
(枕中記)

嬉しや。せめては何も奇麗きれいに」と、萩の折箸土器せりはしかはらけも、よしあり氣けなる待遇もてなしなり。晝ひる恥かかしや  
お僧様そうさま。此粟こゝろと申す物、古いにしへ我夫世わがつまにありし時は、歌うたに詠よみ、詩うたに作りたるところ承うれ。  
今は此粟こゝろを以て、命いのちをつぎ候まふぞや。實じつにや盧生ろせいが見し榮華えいげの夢は五十年、其邯鄲そのかんたんの假かり  
枕まくら、一睡ひとすの夢ゆめの覺さめしも、粟飯炊あひひかく程ほどぞかし。哀あはれや實じつに我々われわれも、打うちも寢ねて夢ゆめにも昔むかしを見  
るならば、慰なぐさむ事こともあるべきに、なう御覽ごらん候まへ。住すうかれたる故郷ふるさとの、松風寒まつかぜき終より夜すがら、  
寢ねられねば夢ゆめも見ず。何思なにひ出でのあるべき」と、不覺そとろに涙なみだを浮うかべける。旅僧りょそうも哀あはれを催もよほふ  
され、墨すみの袂たもとを絞しぼらるよ。更ふけ行くまゝに夜寒よさむさまさり冷ひやえ渡わたる。晝ひる何なにをか焚たき火びに燒たいてあて  
參まらせん。や、思おもひ付ついたり。我良人わがよつこ世よにありし時とき、鉢はちの木きを好すき、數多あまたの木きを集あつめ持もた  
候まひしを、斯かやう様のさまに衰おとろへ。言いわれぬ貧ひんの花はな好すきと、皆人みな々に參まらせて、今はやうく三本さんぼん  
残のこつて、彼あの雪ゆきを持もつたる梅櫻うめいざくら松まつ、別わかて良人よつこの祕藏ひそくらうなれども、今宵こんやの待遇もてなしに、是こゝろを焚たき火びに  
と立たんとすれば、晝ひる暫しばらく。これは思おもひも寄よらぬ事こと。御志おんこころは有難ありがたけれども、重かさねて世よに出いで  
給たまひての御慰おんなぐさみ、無用むようになして給たまはれとよ。晝ひるいや逆さかも此身こゝろは埋木うもぎの、何時いつの盛さかりに何時いつの  
花はな、何時いつの時ときをか待まつべきぞ。只徒ただなる鉢はちの木きを、御身おんみの爲ために焚たくならば、是こゝろぞ採葉さいくわ汲き  
水すいの、法のりの薪たぎと思召おもせ。然しかも誠まことに雪降ゆきりて、仙人せんじんに仕つかへし雪山せつせんの薪たぎ、斯こゝろくこそあらめ。

雪山一稱母の仙人に仕へし山

窓の梅云々  
 凍東頭風度解  
 窓梅北面雪封寒  
 (朝歌集)  
 見じといふ山  
 里の折かけ垣の  
 梅の花いかなる  
 人の見じといふ  
 ちん(管家後集)  
 か、りー織袴の  
 場の四隅に松  
 樹、柳を植う  
 その木になれと  
 の意  
 煙一殿を云  
 御垣守一見るに  
 かく詞花集の  
 歌をとる

面伏一不面目

我も身を捨て人の爲、鉢の木伐るともよしや惜からじ」と、雪打拂ひて見れば、「面白や如何にせん。先冬木より咲初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木より先立てば、梅を伐りや初むべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の、折掛垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪に爲す可しと豫て思ひきや。櫻を見れば春毎に、花少し遅ければ、此木や侘ると心を盡し育てしに、今は我のみ侘て住む、家櫻伐燻て、火櫻になすぞ悲しき。さて松はさしもけに、枝を撓め葉を隙して、かよりあれと植置し、其甲斐今は嵐吹く、松は元より烟にて、薪となるも道理や。伐燻て今ぞ御垣守、衛士の焚火はお爲なり。能く寄て暖り給へや」等閑ならぬ御親切、寒さを忘れ、肌は彌生如月の、暖氣にあたる梅櫻、花見る心地候ぞや。さてしも如何なる御行末。男主人の假名實名、字は何とか申し候ぞ。自然の時のお爲にも、何か苦しう候べき。聞まほしし」と仰せける。妻「ア、人がましやな。古へを名乗るも遺面伏せ。去ながら、此上は何をか左のみ包むべき。是こそ佐野源左衛門常世が成る果。哀れと御覽候へや。さても過にし仁治二年、鎌倉は當最明寺殿の御兄君、經時公の御裁斷。夫の常世は將軍の御供して、在京の其跡の事。常世が父、我爲には眞、佐野兵衛正常、故もなく人知れず闇打に討れ給ひしを、聞とひとしく我夫

は、取て返し下向の時、一族の讒によつて、鎌倉へも入れられず、道より直に御期氣とて、所領莊園召上られ、常世親子が累代の知行、一所も残らず、叔父源藤太常景に押領せられ、生甲斐もなき此有様。親の敵も大概は、推量に紛ひなけれども、實否を糺し討ん爲、折々他國に身を扮し、跡ふり隠す雪の庵、雪は春にも消え残る、夕べも知らぬ武士の、身の上憐み給へや」と、さめぐとこそ泣居たる眞實に、それは聞及びたる物語り。何とて鎌倉に上り、其御沙汰は候はぬぞ。妻さればとよ。夫婦も左は存すれども、運の盡とて、最明寺殿法華堂の座禪に籠らせ給ひ、萬機をいろはせ給はねば、天照神の岩戸に籠り、月日の光かくれし如く、理非の分れん様もなし。去ながら、斯く零落て候へども、取傳へたる梓弓、矢竹心は張詰て、あれ御覽候へ、是に武具一領、長刀一枝、又彼れに、馬をも一疋繋いで持て候。常世常々申せしは、只今にてもあれ、鎌倉に御大事ありと聞かば、此具足取て投懸け、鏑たりとも長刀搔込み、瘦たりとも彼の馬に、懸鞍置てふはと乗り、女房に口取らせ、一番に馳參じ、御着到に列つて、さて合戦始まらば、敵何萬騎ありとても、一番に割て入り、手に立つ軍兵寄合ひ打合ひ、分捕高名譽れを現し、一方を攻破り、君の御馬の眞先駆け、思ふ敵の大將と、無手と組んで刺違へ、死な

御着到一將士の  
別名を記す文書



さうそーに候ふ  
ぞの約

只頼め—只頼め  
しめどが原のさ  
にも草我世の中  
にあらん限は  
(新古今集)

公方の縁—將軍  
へ取次ぐ縁  
御沙汰—新証事  
ともて—賦にか

んず身の、エ、口惜や、此儘ならば 徒に、飢寒に逼り死なん命、なんほう無念の事さ  
うぞ」と、姉妹瓦破と伏沈み、泣きくどくこそ道理なり。旅僧も至極の理に、衣の袖を  
ぞ絞らるよ。最「假しや浮世の浮沈み、斯ては果じ只頼め、我世の中にあらん限りはの誓を  
願ひ給へや」と、言葉を残し残る夜も、明方近く隙白く、雪も小止めば「左らば」とて、暇申  
して出給ふ。姉妹「假の宿ながら、これも御縁と思召し、春お下りの折柄は、立寄り夫にも  
逢ひ給へ。命のあらば我々も」と、さらばくの御名残。最「自然鎌倉にお上りあらばお尋  
あれ。甲斐々々しくはなけれども、公方の縁になり申さん。御沙汰捨させ給ふな」と、言  
捨て出船の、ともに名残や 三重惜むらん。既に今年も臘月下旬、最明寺殿の御臺所松下  
御寮の仰として、俄に稀有の御觸あり。晝夜の早打際もなく、近國残らず觸にけり。使者「な  
ふ忙しやく。只今我們當國へ下る事餘の儀にあらず。さても最明寺殿、天下の政道を  
考へなされん爲、座禪觀法の方丈に閉籠り、近習外様の侍は申すに及ばず、御臺の君  
へも御對面なく、禁足なされ御座候。此隙間を幸とや思はれけん、御舍弟式部冠者殿、  
佐野の源藤太を語り、謀反を起し、終に其身も亡び、源藤太は落失せ、漸々事治つて  
候。斯様の騒の出來するも、最明寺殿館に御座なき故、國に執權なきは、人に魂なく家

牝鷄が云々  
牝鷄之屬惟家之索  
也(巻終)

に柱なく、餛飩に汁なく、鱈に酢の無きが如しとあつて、忝くも御臺所、座禪をお出なさるよまでは、最明寺殿御名代との御事にて、女中の御身に執權職の装束を召され、御側には諸大名の奥方、何れも男の扮装にて、非番當番際もなく、政道執行ひ給ふ事、古の尼將軍に相も替らず候。左は申しながら、人の口には戸が立られず。牝鷄が時を爲るか。鎌倉殿は鷄母じやなどと嘲つて、驚破大事といふ時に、勢が附くか附かぬか。物は試しに集て見よと、阪東八ヶ國の諸侍、悉く物の具して、急ぎ鎌倉へ御參あれ。仰付けらるゝ事ありと觸させられて候が、餘りに諸軍勢遅く候程に、何とて遅はるぞ、催促いたせとのお使を承つて候程に、急がばやと存じ候。やア〜何と申すぞ。それへ御參あるは、武藏相模の御人衆と申すか。先は速き事、急いで御參り候へ。彼へ見えたるは上總下總の御人衆じや。やれ〜端麗なる扮装かな。遅いと御事、御急ぎ候へ。いや是へ見えたるが常陸の御人衆か。道理で眞先な武者が、黄楊の棒を提げたるは常陸坊といふ心か。一段と華麗な扮装。何れを何れと申されぬ。此國々へは最早參るには及ばぬ。足を助つた。ヤア未だ上野下野の御人衆がお見えな。先づ上野へ參らふ。何といふ、是へお出あるが上野の御人衆じや。やれ〜嬉しや參るに及ばぬ。今までの扮装に

輿奪其職に代  
 るを云ふ以賢  
 代賢謂之輿奪  
 (孔子家語)  
 精好の長絹一經  
 練糸細生糸なる  
 衣、長絹は袖括  
 ある直垂  
 預る役即ち弓矢を  
 預る六手(弘安  
 節)の祝儀一炬  
 五ヶ月になれば  
 言のは一言葉に  
 恥かしさをかく

劣らぬ美々しい事かな。唯一刻も御急ぎ候へ。最早悉く御参り候。我們は先へ罷歸り、  
 各々鎌倉へ御着ある由、申上ふと存ずる。皆々聞れ候へ。關東八州の諸軍勢、是まで御  
 着候ぞ。其分心得候へくと、觸て通りし猛勢は、勇々敷も亦 三重華々し。

女勢揃へ

古へ秦の朱序が母、千餘人の女武者を領じて、襄陽に城を築き、賊敵を防ぎ、夫人城  
 と名けしは、上代異朝の賢婦ぞかし。鎌倉の御臺所、先妣松下禪尼の風を慕ひ、自ら執  
 權の輿奪ぞと、烏帽子際氣高く、水干の衣紋かき繕ひ、美精好の長絹、黄金造の御佩刀、  
 式目所の上段に、悠々と坐し給へば、左右に白齒の御侍女、島田解いて若衆鬘。廊下傳  
 ひの長袴、花を竝べし如くにて、御太刀の役、調度掛、作法正しき廣庇、諸大名の御前  
 方、何れも男の扮装にて、面々殿御の役々の、座並亂さず伺候ある。都六波羅陸奥守繁  
 時の北の方、お蓮の前、連理の若松若竹に、比翼の鳳凰、唐草の繡したる直垂、萌  
 黄裾濃の袴越し、横幅廣く結ばれしは、此月帯の御祝義と、言のはもじさつよましざ、  
 袖かき合せ着座ある。次は秋田の城之介義景の御簾中お隆御前は、成人の子の親なれど、

何某の中將殿の季娘。烏帽子馴れたる黛に、戀を染込む狩衣の、露露々々と結び下け、裏紫の藤袴、男染たる摺足も、爪先反てぞ見えにける。是も同じ風折に、巻繪の飾太刀佩たるは、足利左馬頭の御内室お吉の君。此春嫁入て人中を、信夫文字摺信夫布、折目正しく着馴せし、素袍袴ののり立も、やはくとせし挨拶の、「いづれも是はお早ふ」と、物靜にぞ伺候ある。次は佐々木隱岐の入道の息女お百の姫。目結の直垂、五色の絲にて

目結—四つ目結の模様を白くして他を染むる

子持筋—子持にかく、之は袴の時衣服にて小の筋を引いて、襦とす、襦袢、袴邊—五十にか

菊綴し、嫁入盛りの花盡し、袖の襲ねに匂はせて、大人くろしき懸烏帽子、行儀正しき割膝に、袴の襦の高ければ、嘸紅の下紐の、裾や分れん心憎さよ。同じく續いて四條藏人の奥、左近のお方。金紋紗の狩衣、薄色の奴袴、白銀造の太刀横たへ、寺社奉行の座にぞ著れける。大目付は宿谷の左衛門が女房おつけの前。是も二人の子持筋に、鶴龜染たる素袍袴、打刀差彫し、四邊近所を見廻して、目を働かす顔に、お役は左ぞと知られける。是は名越金吾の後家、熊千代が母おきいといふは、年ばいも磯部の善知鳥安方の子を後見て身を捨す、髪は切ても何のその、我子の末も君が代も、萬歳鳥帽子引冠で、御披露所に著座ある。顔も艶々ほやくと、老て再び若後家や、昔の蝶の吸残す、花の露浮くばかりなり。次は山名の惣領娘、おらくは今年十八歳、土岐の二郎が妹、お

善知鳥安方—奥州外瀬に栖む鳥、うとよと鳴りば子は安方と吞ふといふ

お授へ娘の着る  
振社にかく、詰  
袖の年増の着物  
大友一さいいに  
かく  
大納戸一衣服調  
度を納れ置く所

平禮一帯劍せざ  
る平侍  
白丁一白き袍を  
着る奴僕  
退紅丁一桃色の  
待衣を着たる下

らい地一臨理と  
守く、餘地の職  
(仙言集覽)

足弱車一乗りが  
ひなきに嘔ふ

振といふも脇詰の、年は往ねど格好の、大友太夫のお内儀おさち御前、思ひくの太刀狩衣、大納戸小納戸、進物所御膳番、役所々々に著座ある。さて其外御臺所の彌惣が女房、圍爐裏の間の加藤が女房おはい、おこん、料理人の三太が女房お鍋の前、油奉行蠟燭奉行、酒奉行の彌吉兵衛が女房おたるの前、おかんの前、茶道坊主の珍齋が妻、おちやくの前に至るまで、其品々の男扮装、直垂狩衣布衣素袍、長袴切袴、平禮白丁退紅丁、袖を列ねし粧ひは、女護の島とも謂つ可し。賑はよしとも愚なり。中にも佐々木入道が息女、今日の著到承り、中門の扉押開けば、東八箇國の諸軍勢、召に従ひ参上ある。當國には伊藤の一黨、長野清原會我山越、河津大場竹の下、櫻井岩永土肥岡崎、三崎三浦佐原田原、小笠原小山平山宇都宮、手勢々々を引率し、旗標馬標兜の星を輝し、中門の廣庭より、大名小路の極樂橋、錐を立つ可き埒もなく、人馬滿々並居たり。晴がましくぞ三重見えにける。佐野源左衛門常世は、「今度の出陣望む處の本望」と、斷れ具足に鑄刀、瘦馬に繩韁、女房は長刀擔け、馬の口に引添ふて、「物其數にあらざる氣色、嗤笑ふらん。笑はば笑へ。所存は誰にか劣るべき」と、心ばかりは急けども、弱きに弱き柳の糸の、よれによれたる瘦馬なれば、打てども障泥れども、先へは進まぬ足弱車の、

最明寺殿百人上臈

勢づかひ一軍勢  
備し  
腹巻一鎧の二層  
草摺七枚ありて  
袖なし

御所の此方に駒を控えて見渡せば、東八ヶ國より集つたる、數萬の軍兵これを見て、「如何なる者ぞ見苦しや。彼の態で此中へ出頼は何事」と、一度に哄と笑ふ聲、鯨波をつくるが如くなり。此音奥に聞えしかば、御臺所御悦喜あり。「自から女の身にて此度の勢揃へ、斯様に従ひ集まる事、これ皆殿の御威光目出度きゆゑ。若も重ねて如何なる大事あるとて、先づ此如く馳來らば、即時に敵を追散し、鎌倉は千代萬代、心安や目出度やな。いで軍兵に一禮して歸さばや」と、宣ふ處に、裏の門より最明寺殿、旅に窺ひし御有様。御臺所これと驚き給ひ、「さては座禪を御出かや。目出度上の目出度さよ」と、悦び給へば、若君も立出て、御對面こそ賑しけれ。我此度座禪禁足と偽り、誠は廻國行脚して、民の安危を窺ひし、其隙間を見て冠者奴が悪逆、天の責目前たり。又天女丸が武功未頼もしく、北の方の勢づかひ、彼是以て入道が妻子ぞや」と、御悦びは限りなし。「さて此諸軍勢の中に、横縫の斷れたる腹巻して、鑄長刀を持、瘦たる馬に女房の轡取たる武者一騎ある可し。夫婦共に召連れ來れ」と御説あれば、佐々木が息女承り、臆て御門に立出る。大勢とは言ながら、花紅葉と扮装中、見まがふべくもあらばこそ。つかくと立寄て、息女「これく上意なるぞ。男女とも御前へ罷出られよ」常世驚き、「何と某夫婦御前

へ召さるよとや。あら思ひよらずや。人違ひにても候歟。今一度御伺ひあるべうもや」とありけれ共、思女「いやく、如何にも見苦しき扮装の武者一騎、女房に瘦馬引せたる者あるべし。召連れ参れとの御説の上は、左様の者は外になし。はやく参られ候可し」駕何がさて此上は違背申さん様はなし。實にく女房、某が敵又讒訴申し上、召出されて頭を刎られん爲と覺えたり。如何あらん」といひければ、鬘ヲ、よししく、それも力なし。假へ夫婦が御前にて生首を打るとも、一度鎌倉殿を拜し奉る悦び、一念は潔く親の敵讒人を、三日が内に取殺し、此世の妄執晴すべし。いざさせ給へ」と打笑ひ、大床さして見渡せば、今度の早打に上り集る兵、綺羅星の如く竝居たり。さて御前には諸侍其外数人竝居つよ、目を曳き指をさして笑ひあへる其中に、横縫の斷れたる古腹巻に、鍔刀女房にかたけさせ、戦慄たる氣色もなく、参りて御前に畏る。最「ヤアく、彼なるは佐野源左衛門常世よな。如何に女房、これこそ日外の大雪に宿借し修行者よ。見忘れてあるか。其夜的情忘れ難く、召出してありつるは」と宣へば、夫婦の者長刀からりと投棄て、「あつ」とばかりに頭を下け、感涙袖をぞ浸しける。重て仰出さるとは、「汝が叔父源藤太常景、父政常を討て、剩へ累世の知行を押領したる罪科紛れなく、我安房國を巡

りし時、彼の者落人となつて隠れしを、房州の探題に申し付け、成敗を遂させたり」と、御詞の下よりも、獄舎の雑色、首級桶持て常世が前に差置たり。常世餘りの有難さに、蓋を取れば、源藤太が首級なりけり。常「這は忝き御高恩、冥途の父が悦び、現世の我々が本望。何時の世に何を以て、此御恩を報ぜん」と、手を合せ涙を流し、大床に額をつけ、仰ぎ居るこそ道理なれ。猶々仰出さるゝ旨あり。「近ふ參れ」と御膝近く召され、魚いで汝佐野にて女房が申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あるとならば、斷れたりとも其具足取て投懸け、鑄たりとも其長刀を持、瘦たりとも彼の馬に乗り、一番に馳參るべき由申つる、詞の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。先く沙汰の始には、常世が本領佐野の莊、三十餘郷還し與ふる處なり。又何よりも切なりしは、大雪降て寒かりしを、女房が情に、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚あてたりし志をば、何時の世にかは忘るべき。さらば女房に引出物せん。いで其時の鉢の木は、梅、櫻、松にてありしよな。其返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀「安堵に取副へ賜ひければ、常世は是を賜りて、三度頂戴仕り、「これ見給へや人々よ。始め笑ひし儕輩も、是程の御氣色、嘸羨しかるらん」

安堵—本領に安  
堵せよとの御歌

引出物—遺物



上野や云々か  
みづけぬさぬの  
舟ノ取り放し親  
はさくれどわは  
さかれがへ(萬  
葉集)

さて國々の諸軍勢、皆お暇賜りて、故郷へとてぞ歸りける。謠其中に常世は、其中に  
女房は、悦びの眉を開きつゝ、今こそ勇め、此馬に打乗りて、上野や佐野の船橋、取放  
れし本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける、歸るぞ嬉しかりける。

